

信者の親睦季刊誌



教会設立



38号

昭和四十年十二月

佳吉カトリック教会

# 30周年記念座談会

## その昔を語る

昭和四十年十月二十四日  
住吉教会聖パウロ三木館にて

### 御影に教会を始めた当時

**司会者**— 今年が丁度住吉教会創立三十周年に当たりますので、この機会に住吉教会の歴史を残すという意味で、古い信者の方のお集りを願い、それぞれ、思い出話をしていただき、その記録を止めるために今日の催しとなったわけで、皆さんにはお忙しい所、御出席下さいまして感謝に堪えません。それでは順序として、教会創立の以前のことから、切り出して、まずメルシエ神父様から御願ひしたいと思います。

**メルシエ神父**— 私は住吉教会創立当時の主任神父だったということで今日お招きをうけたのだと思います。その当時私は日本に来て五年目で、日本語の勉強も済み、奈良の教会に居りました所或る日カスタニエ司教様から手紙をいただいたんです。(その手紙を懐中から取り出しつつ見せながら)これですね、これは私に対する任命書でした。日付は1924年11月22日で、中には『あなたは11月一杯で奈良教会を辞めて、神戸の東の方御影の方面に新しい教会を建てる準備をなさい』と書いてあるんです。そして「そのために神戸の下山手教会に席を移して機会を待つように」とありましたので、12月から下山手教会に移りました。その時下山手ではペリン神父さんが主任、山中神父さんと、それに竹野神父さん(後に病死されました。)に私と、三人の助任が一緒に暮しました。私は司教様の命で御影の方面に教会の場所をさがすために、伝道婦の木元章さんと一緒に毎日のように神戸の東部を歩き廻っていましたが、或る日木元さんが御影にとてもよい家をさがしてくれたんです。それが申御田九三二番地の日本家で、二階建一寸した広さもあり、庭もあって大変いい感じでしたので早速それを手に入れて、教会を始めることにいたしました。これが御影の教会、つまり今の住吉教会の前身の発祥です。場所は阪神電車御影の駅の北約100米上った所の東側、野村医院の東隣りでした。場所を探し始めてから丁度六ヶ月目で、私がそこに引越したのは1925年の5月5日でしたから、この日が住吉教会小教区が創立された日です。

**司会者**— すると住吉教会は下山手教会から分かれて独立した教会ということになりますか。

**メルシエ神父**— そうです。大部分は下山手教会の地域でしたが東の方は一部夙川教会の地域も入って来ています。多分東は本山村までだったと思います。

**山邑美重子**— たしかそうでしょう。私もその頃芦屋川の上の方に住んでいましたが住古教会ではなしに、ずっと夙川の教会に行っていましたから。—

**司会者**— 御影の教会が出来た時にすでに近くに住んで居られた信者さんも相当あったわけでしょう。

**メルシエ神父**— ここに居る神沢さん、中里さん、川端さんなど皆そうでしょう。

**神沢いと**— 私はさっき言われた野村医院につとめていましたから、丁度教会の隣りになるわけで、大変便利でうれしゅうございました。

**司会者**— 飯島幡司先生の一家も昔、御影に住んで居られた事を私は記憶していますがそれは当時よ

りもずっと前だったかも知れません。草創の時代に神父様もずい分と苦勞なさったんでしょね。

**メルシエ神父**— 私は御影教会を始める時に布教伝道のためには優秀な伝道士が是非必要だと感じていましたので、早い目にさがすために鷹取の、ジュビア神父様に相談していました所、丁度よい方があったんです。それが和田実さんでした。和田さんは当時、鷹取政会に所属していましたが、私がかねて、伝道士にはぜひ高等教育を受けた人と望んでいましたので毎日、マリア様により伝道士を与えられますように祈っていたんです。するとこれに対して丁度ピッタリの人で大阪の外語を出てフランス語もよく出来る方でしたが只、病身でして、私の要求にも一日に一時間位の手伝いならいたしましょ、との事だったんです。それで承諾して来てもらったのが2月11日の聖マリアのルルド御出現の祝日で、私は優秀な伝道士を与えられたのもマリア様の御かげだと今だに忘れません。その後も和田実さんはほんとによく働いて下さいましたが残念な事に昭和24年8月とうとう亡くなられました。

**司会者**— その当時の信者の数は？

**メルシエ神父**— ざっと120人位だったと思います。その時の人は今でも住吉に沢山居られますね。今日もここに居られる方々皆熱心でした。中村さんの姉妹が公教要理の御手伝いや、聖歌のオルガンをやって下さってましたし、聖歌は村上義夫さんが力を入れて下さいました。

**山邑美重子**— 中村さんのお姉さんの文子さんとは私、聖心女子学院で同級でした。住吉でお働きになってから間もなく修道院に入られはしたが熱心なお方で、今でもなつかしく思っています。

**デーラー神父**— ここに居られる尾形竜子さんはその妹さんですね。

**司会者**— そうですね。私も不思議なご縁であの方が信者になれる以前、古い昔の事ですが中村さんのお家とは、隣り同志だった関係で大変心安くしていただきました。また村上義夫さんは今は山崎の方に居られるそうですが、とてもいいバスで歌っていたことは印象的でしたね。あの方の妹さんも修道院に入られましたね。

## 住吉へ移転して

**司会者**— ところで御影申御田の仮教会から翌年には今の場所に教会が移ったわけですが、その土地はどんな状態だったんですか。

**メルシエ神父**— その時ここは吻論畑で、玉葱が植えられていましたね。附近には家は殆ど少なく畑ばかりでした。どうしてここに決めたかって？それは司教様が決められたんで、多分安かったからでしょう（笑）。広さは約千二百坪でした。

**デーラー神父**— 東側の道の所には川が流れていましたね。ウソ川とってたでしょ。

**千葉健吉**— そうです。今はなくなってしまったが、— 私は元来がこの土地で生れた者でよく知っています。子供の時分にこの川によくメダカやエビを取りに行ったものでした。その時から思うと、この辺もすっかり変わってしまったものです。



**メルシエ神父**— それで新しい教会の場所も決まりましたので早速建築にかかったわけですが、着工したのは昭和11年7月で5ヶ月かかって出来ましたのは12月でした。カスタニエ司教様が来て下さって献堂式を挙げたのは12月13日です。その時の建物は聖堂、司祭館、伝道士の家でいずれも木造。司祭館だけは外部モルタル張りでしたが、それは今でもそのまま残っている姿の通りでした。



**デーラー神父**— 「土地はたしかに広がったんです。今の状態では約700坪になっていますがそれは戦後の区画整理で縮められたんです。その時は北側も今よりは約5米位東側も約5米ほど広く、南側はもっと広く20米ほども広がったでしょう。これで教会の土地は今見ますと北半分と南半分とでは丁度司祭館と幼稚園遊戯場との間で一つの段になってますね、あのような段がもう一つ幼稚園運動場の南の部分にあって全体が三段になっていました。それがなぜ消えてなくなったかと言いますと、昭和13年の水害で住吉川の土砂が流れ込んで埋めてしまったからです。ですから、今の教会の土地は昔の畑の土の上に北の方で約五寸、南の方では三尺位の砂がかぶってしまって、それだけ高くなったわけですね。カスタニエ司教様は後で言っていましたよ — ただで地上げが出来てもうけたとね(笑)。

**司会者**— 最初のおみ堂はどの位の広さでしたか。

**メルシエ神父**— 畳敷きで五十畳位だったでしょう、北側には廊下がありまして襖の仕切り、祭壇は西の方で入口は東の方になって居り、北から入ったものです、祭壇正面には聖パウロ三木の画像をかか掛けていました。

**司会者**— このおみ堂が聖パウロ三木にささげられたというのは何か特別ないわれがあったんですか。

**メルシエ神父**— 理由はありません。ただ日本の聖人にささげたみ堂が大阪の関目の教会以外になかったものですから、私はこの機会に日本人信者のためと思って聖パウロ三木と考えたわけで、司教様もこれには喜んで賛成して下さいましたので、これに決まったのです。

**デーラー神父**— 祭壇にかかっていた聖パウロ三木の御絵は東京の信者の画かきさんの木村圭三さんに書いてもらったものです。カスタニエ司教さんがこの方に頼んだんです。それと同じ絵が今でも東京の上智大学にあるそうです。

**原田すさ子**— そうなんです、私も初めに上智大学の聖堂にかかっているのを見ていましたので、それと同じものが住吉にあったのを見てほんとにびっくりしたんです、矢張り同じ画かきさんのものでしたね。



**デーラー神父**— ほんとにいい画でしたが戦災でみ堂が焼けた時に一緒に焼けたんですが、その時出してればよかったのに後で残念でした。

**司会者**— 御影から住吉へと教会が替って来た時分の様子はどんなものでしたか？

**メルシエ神父**— 信者は少なかったが組織もどうやら出来て教会委員には小高親さん、近藤さんの二人になっていただき、婦人会の方は松本鞠子さんなどが中心になってなにかと手伝っていただいたものです。そして若い青年の方では、さっき申した方々が、活躍して下さったものでした。

**山邑美重子**— 長谷川さん(現住友化学工業社長長谷川周重氏)もその時分にたしか住吉教会で洗礼をうけられたのではないのでしょうか。ハッキリ知りませんが。私は今でもあの方が聖体拝領をして居られる後姿が眼にうつって、昨日の事のような気がします。

**司会者**— その時分の近隣の教会の模様を一寸 —

**メルシエ神父**— 東隣りは夙川教会でしょう。芦屋はなかったから。西隣りは、矢張り下山手教会の範囲でした。六甲教会は後から出来ましたから。中山手は外人専門でしたから日本人に関係はなかったんです。

**司会者**— 夙川教会には永田神父さんが居られましたね、それで永田神父さんがあの悲壮な最後をミサ中聖堂内でなされて、その後任にメルシエ神父さんが住吉教会から代られたというわけでしたね。

**武田綾子**— 永田神父さんというと私は忘れられぬ思い出があるんです。私は聖心女子学院で公教要理の勉強してその洗礼は夙川で永田神父からうけたんですが、その時の試験がとてもむつかしかったんです。今はそんな試験はないようにきいていますが、その時はなんとあの問答様式の公教要理を始めから終わりまでカッチリと聞かれましたほんとに四苦八苦でした。それと、堅信の時もそうでした。聖堂の中で信者のみなさんが大勢居られる前で一人ずつ、立って司教様の公教要理質問に答えるわけで、或る大人の方は途中でつまってしまって、まっかな顔をして居られるのをみて全く気の毒に思ったことがあります。昔はほんとに信者になるのも全くきびしかったです。それを思うと今はほんとに楽なものですね。

**司会者**— そうですね、なにしろ昔はカトリックとは言わなかったんですから。天主教とってました。私は小学校の時、先生からあなたの家の宗教は、ときかれて天主教といたら、天理教ですかといわれましたよ。(笑)

**真浦みね**— 昔は教会の勉強でも皆暗記させられたものですね。武田さんが言われましたように公教要理でも始めから終わりまで丸暗記でした。そして祈祷文でもやはり丸暗記でした。

**メルシエ神父**— 真浦さんには私も驚きましたよ。戦争中でしたか、夙川の教会で、夜のおいのりの時に、途中で停電してしまったんです。すると祈祷文が読めないのが皆、つまってしまって困ったんです。すると真浦さんだけは、あの長い聖マリアの連祷をスラスラ始めから終わりまで一人でとなえ終えたんですね。まっ暗がりの中で。ほんとに感心しました。

**真浦みね**— まあ—

**デーラー神父**— きびしかったと言うと下山手教会の主任司祭ペリン神父さんでしょう。

**尾形竜子**— これは有名です。とても六ヶしい神父さんで私達も大変きびしく導かれました。

**司会者**— しかしえらい神父さんでしたね。人にもきびしかったと同様に己自身のためにもきびしい生活をされた方でした。クリスマスの日など告解をしに行くと、寒い告解室の中でうずくまって何時間も信者の告解をきいて居られました。日曜日ミサをよくサボっていた私などクリスマスにはせめて告解をしたいと思って行くと、すぐには告解をゆるされませんでした。「あなたはもう少し日曜日休まないようになってからでないと告解を聴きません」といわれましたね。クリスマスに御聖体をいただけなかった思い出があります。ペリン神父さんは聖体をいただく人にはその日曜日に必ず告解をして心を浄めてからでないとさづけられませんでした。ですから毎日曜日告白です。

**メルシエ神父**— それで面白いんですよ。住吉教会の始まった頃は、西の方は下山手教会所属であった人と、東の方は夙川教会所属であった人の二通りの信者が毎日曜日来たわけですね。すると御聖体のために毎日曜日必ず告解をしてからいただく人と、告解をせずにいただく人があるんです。告解をする人は下山手から来た信者、告解をしないのは夙川教会から来た信者(笑)— これですぐにその人がどこの信者だったかわかるんです。今はそんな事ありませんが—。

**真浦みね**— でも神父さん— 毎日曜日みな告解だととても忙しくて困られるでしょう?(笑)

## カスタニエ司教さまの思い出

**司会者**— 昔の神父さんは説教も長かったですね。ペリン神父さんは40分位も。

**メルシエ神父**— 一週間かかって充分準備するんですから、よくわからせようと思って時間が足りなくて、それで長く聞かせたいからでしょう。(笑)

**司会者**— カスタニエ司教さんもそうでした。最後になって、「結論として言いますと—。」となつてからでも、まだ10分間位なさつたと、だれかが言っていましたよ。— (笑)

**司会者**— カスタニエ司教様もこの教会の主任司祭として居られた事がありましたね。

**デーラー神父**— ええ、二度ありました。一つは水害のあった時—、モーラー神父さんが主任としておられた事になっていましたが、しかしそれはほんとは司教様が主任だったんです。それはモーラー神父様は日本に来て間もなくで、住吉に一人で居られたんですが、心もとなく思われたため、司教様が主任となってあげるから辛抱しなさい、と言われていたんです。また間の悪い事にモーラー神父様が住吉に来て一ヶ月目にあの大水害で、教会がひどい被害でしょう。それでモーラー神父様は司教様に手紙をかって「司教様あなたが主任司祭ですから、よろしく願います。」と言って涼しい顔。(笑)

**司会者**— これは面白い。

**デーラー神父**— まあ、それが一回と、次は戦争中に日本人の田口司教様に教区長の任務を譲って隠退されてから住吉に住むことになった時との二回です。カスタニエ司教様は住吉教会建設の恩人ですと同時に最後は自分が主任司祭として住まわれ、とうとうこの教会で亡くなられたんです。

**メルシエ神父**— 丹毒でした。お年は六十三才、からだも大きく元気な司教様でしたが、今から思えば若死ですね。不思議な事に夙川教会を建てられたブスケ神父様と同時に亡くなられた事でした。ブスケ神父様が昭和十八年二月十日、カスタニエ司教様は三月十二日でした。或る神父様が、司教様が亡くなる前に見舞いに行かれると、私はもう死にますから、死んだら立派な葬式をね。と冗談を言って居られたそうです「うそだと思ってたらほんとに亡くなられました。ほんとに最後まで明るい司教様でしたね。

**司会者**— 司教様と一緒にこの住吉におられたんでしょうか、あのお年寄りのビロース神父様は?

**デーラー神父**— ビロース神父様が先に主任として来られていて、それから司教様が住吉においでになったんです。その時の手助けとして特に公教要理を受持つために西村神父様が呼ばれたんです。後で西村神父様も徴集されて海軍に入られましたがね。ビロース神父様はその時もう大分年でしたから少し弱っておられましたね。

**川端シヅエ**— 面白い事があったんです。ビロース神父様は散歩もなさいますし、よく外に出られました。そして信者の宅を訪問されるんですが、私の家に来るのに隣りの家にまちがえて入って大きな声で「コンニチハー」と言われましてね、私はおかしいやら、お気の毒やらで・・・(笑)

## 大水害と戦災の思い出

**司会者**— 今日は折悪しくモーラー神父様に御出席願えませんでした。水害のあった時の事を皆さんからお話し願ひ度いですが。

**川端シヅエ**— 昭和十三年でしたね。あの時はほんとに大変な事でした。モーラー神父様が近所の方を沢山教会の中へ助けられて皆からとても感謝されました。

**千葉健吉**— あの時はこの近所でもかなりの死人が出ました。私はその時信者ではなかったんで、教会の内部の事はよく存じませんでした。何でもある建物(多分以前の伝道場?)の中に死んだ人が収容されて、お棺がおかれローソクの火が灯っていたことを憶えています。私はその時教会の西の方の丁度今グランドになっている所辺に住んでいました。住吉小学校の南側の壁の下あたりでも死人が埋まっていたね。ともかく恐ろしい水の勢でした。

**司会者**— この水害が住吉教会としては受けた災害のまず第一歩だったんですね。水害につづいては戦災、それから最後は台風の被害でした。それで戦災の時の印象をデーラー神父から御伺いしたいです。

**デーラー神父**— 戦災をうけたのは8月6日でした。その時は教会では私と、ビロース神父様と二人、それから和田さんですね。警報が鳴って空襲が始まったのが午前0時「それから二時頃まででした。何度も飛行機がやって来て焼夷弾をバラバラと落して行くんですね。司祭館の方に五ツ落ちて来ましたが幸いこれはうまく消しました。聖堂の上には二十発も落ちて来ました。それで消そうと思って聖堂の方へ行きましたが火の手が大きくて到底手が出ず、香部屋へ行って品物を運び出そうとしましたが煙がーぱい立ちこめて息苦しくなりとうとう外に出てしまいました。

**司会者**— 御聖体はどうだったんですか。

**デーラー神父**— そう、空襲がひんぱんに来るようになってからは私は御聖体は出来るだけないようにしていましたし、また祭具、祭服など大切なものは皆とりまとめてトランクに入れていざという時には持ち出せるようにしていました。ただ残念だったと思うのは聖パウロ三木の聖絵をもっと早く出しておけば良かったと思うことですね。

**司会者**— 教会の建物で結局焼けてしまったのは —

**デーラー神父**— 焼けてしまったのは聖堂だけでしたね。司祭館の火は消して助けたんですが聖堂が燃えると、人がうつつて来る心配があったんで私はバケツで盛んに司祭館の外壁に水をブッカケて燃えないようにしました。

**川端シヅエ**— 和田伝道士さん宅は縁の下から燃えだしましたね。私も教会の方へ消火のお手伝いにかかけつけて伝道士さんの宅はなんとか水をかけて消しとめました。

**デーラー神父**— 近所の信者のみなさんがずい分協力して下さったのでほんとに助かりました。それで結局伝道館には落ちず、司祭館、伝道士宅など聖堂以外は皆どうにか火を消して下さいまして残ったわけです。それで私はいつも空襲の時に香部屋の壁の所に避難することにしてそこならまず安全だし、またどこが焼けても飛び出せると考えたので、そこに居ることにしていました所、大分たってから今度はそこへ行ってみると、なんと十キロ程もある焼夷弾のカバーのような蓋が落ちているんです。実はその時ほんとにギョッとしましたね。もしも私がある時そこに居たら、どんなになっていたか。

**司会者**— いや、全く恐ろしい経験でした。

**デーラー神父**— すんでから数えてみたんですが教会の敷地内に落ちていた焼夷弾の数は80発ありました。

**司会者**— 近所の信者さん宅などはどんな工合でしたか。

**デーラー神父**— ふしぎなことに殆んど全部助かったようでした。

**中里矢須子**— 私の宅も焼けずにすみしました。

**川端シヅエ**— 教会の方へ援けに行きましたが、私の方は焼けずです。

**神沢いと**— それでも焼けた家は大分あって、教会から上、国道まではずっと見通しでしたものね。

**尾形竜子**— 教会では伝道館が残ったんでミサはここでずっとあげられていました。

**五十嵐喜世子**— 私は疎開していましたので、一住吉の震災の時の事は知りませんでした。後で話を聞いてびっくりしたんです。

## 都市計画で狭くなった教会

**司会者**— 空襲の次の災害というと、台風の被害ですか。

**デーラー神父**— そう、それもあるんですが、その次は戦後の都市計画による教会の敷地の強制収用でしょう。・・・これは災害とは言えませんが、教会としては一つの難事でしたね。私は実はその二年前にフランスへ休暇で帰っていて知らないんです。ほんとはベロー神父さんがその時のことをくわしく話せるんですが、代って申し上げますと、初めに1200坪あったのが約750坪程になったんですから400坪程減りました。北側の道路が約5米、東側の道路が約5米それに南側が約20米もとられて新しく道路が作られてしまいました。その代りに司祭館の西側がすぐ境界だったのが約10米も西に移ってそれだけ換地として呉れたんです。少いですが一、勿論これらの費用は凡て市が負担はしてくれましたが、教会としては大きな損失でした。この敷地の移動で伝道士宅も少し南西に移し、伝道館一これは聖堂が震災で焼けてしまって後は仮聖堂として用い、ミサはここで毎日行っていましたが一これも、境界線にかかりますので南西に移築させました。そんなことで教会の中はゴタゴタして半年以上もかかったのでしょうか、やっと完成して、不満足ながら平静な状態がつづいてから、今度はあの台風の災害をうけたんです。私もその時フランスに居て病気で寝ていたんですが、ベロー神父さんから知らせを受けてほんとにビックリしました。

**司会者**— 今日はベロー神父さんが日曜学校生徒の運動会の方へ出て居られて、御出席願えませんので、その台風の災害の事については又の機会にベロー神父さんから詳しくお話しをしていただくことにいたしましょう。ところで今日は古い皆さんにこんなに集まっていたいで滅多にない機会ですので、皆さんになにか面白い過去の思い出をお話し願いたいんですが。

## 神父さんとおひげ

**安田久代**— 私は昔育ちなもんでこんなことを申し上げるとなんですが、小さい時から神父さんというと皆フランス人でひげを生やした方ばかりだと思ってたんですが、この頃はアメリカ人とか、ドイツ人とか、一ひげもない方があって、どうもなんだかピンと来ない……。

**司会者**— 同感ですね。メルシエ神父さんも、最初住吉に居られた時はひげがありましたね、夙川教会に代られてからおそりになったんですが、何か心境の変化でも？

**メルシエ神父**— いいえ何ともありません。私も最初はひげをそってしまいたいとの考えだったんですが、司教様に叱られるのではないかと心配して、それで或る時私は司教さ





まに「或る神父が、ひげをそってしまいたいので司教さまに御ゆるしを願ったら許可されますか、それともお叱りになりますか」と、他人事にしてさぐりを入れてきいたんです。すると司教様は「いいえ、なにも怒りませんよ、自由ですから勝手にしたらよろしい」と言われましてね、私はホットして早速翌日そってしまいました。

— (笑) —

**司会者**— さぐりを入れてそるとはね—。

**真浦みね**— その時、メルシエ神父様が私にね、「真浦さん、あなたよく切れるカミソリありますか?」と言われるんでしょう、変だな、カミソリで神父さん何を切るのかしらと、紙でも切られるのかしらと、思って出したんです。そしたら暫らくしてから神父さんの顔を見てビックリ、全く人が変わってしまったようでした。

— (笑) —

**メルシエ神父**— 次の日曜日にミサを立てた時、侍者のこどもが私の顔を見て、なんとも言いようのない変な顔をするんですね。そして帰る時でも、いつもするのにその日は私に挨拶しないんです。

— (笑) —

**デーラー神父**— 大体神父がひげを生やしていると支那などでは尊敬されるんですね。日本でも子供達は、神父さんのヒゲに親しみを感じてくれますね。今は神父さんになった朝山さんなど、小さい時に私のヒゲをよくひっぱって遊びました。それで神父さんになってから私の所に手紙をくれて、神父さん、昔よくあなたのヒゲを引っっぱってごめんなさいってよこしましたよ。

— (笑) —

**司会者**— いやこれは面白いお話しをうかがって愉快でした。今ほんとに皆さんお忙しい中を来ていただき、いいお話しをきかせていただき有難うございました。それではこれで終わらせていただきます。

## 教会風俗の変遷

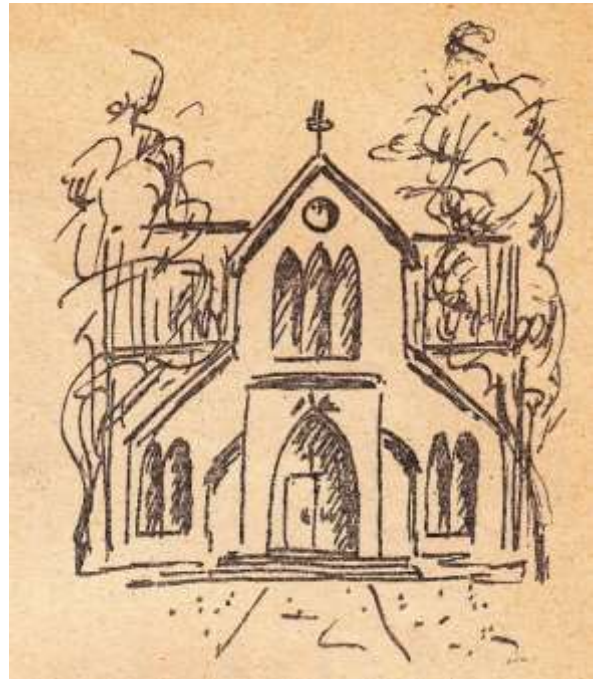
教会の歴史を回顧する時、裏面史とも言うか、教会風俗の変遷をふりかえって見るのも興味がある。南蛮屏風などを見ているとよくわかるが、日本人の服装は歴史的に非常な変化をしているが、それに比して西洋のものはあまりに変化はなく、聖職者の服装も、その時代のものは戦争前までのものとくらべ大した差はないのがわかる。スータンの上にマントを着ていたのはつい先頃までであった。そして黒のスータンだけが唯一の服装で、外出にも、室内でもこれで、夏などは暑いのでアルパカを着たものだった。ところが第二次大戦後は大きに変化し、今日では神父さんは、ローマンカラーに背広とズボンで外出されるし、夏は開襟シャツという軽装が許されている。帽子は昔は黒のつばの広い山高帽型のみだったが今日では、それは全く見られず、ベレーよし、中折れよしいうことに変化した。ただ修道女の方だけは戦前も戦後も、百年前すら殆んど変化はしてないと言ってよい。一方信者の方はどうだろう。これは日本の時代が変わったと同様に変遷した。チョンマゲから散髪へ、和服から洋服へと。特に女子の場合、戦後洋装一辺倒となったのは実に大転換だ。それに従って教会でも聖堂は畳敷きだったのが、もうそれはどこにも見られず、全部の教会が椅子席になってしまった。けれどもここで特に注意したいのは戦前は、クリスマス、イースターの二大祝日には男子は多くモーニング、もしくは紋付羽織袴でミサに与った。壮年だけではない未婚青年も矢張りモーニングを着た。それに比し、今の服装はチト淋しい気がせぬでもないのだ。

# 神戸カトリック教会小史

腰高輝次

## —住吉教会の正門こそ 二十六聖人の通った道だった—

神戸の地でカトリックの最も古い歴史の跡はというと、それは四百年の昔から初まっているというべきだ。そんな話を持ち出すと人は突拍子もないと言うかも知れないが、実際の足跡だから、しかも尊い足跡だから大切に考えてみる必要がある。東洋の大使徒といわれ、日本へ初めてキリストのみ教を伝えられた聖フランシスコザベリオは1549年8月被昇天の祝日に鹿児島に上陸されている。それから平戸、山口を経て京都へいかれたのであるがその途次神戸の沖を船で渡り堺に入港、上京されたことが記録に残っている。神戸沖を通られた時は丁度クリスマス前後項で、聖人は底冷えのする船中でマントにくるまりながら寒さにうずくまりつつ、祈りに時を過ごして居られた。これがそもそも神戸の町に聖教



の光がかすかではあるがうつった最初といえよう。聖人が日本で蒔かれた種はその後次第にみのり、(1600年)には信者の数は六十万人に達していたと記されているから、或いは神戸兵庫の地方にも信者の数人はいたかも知れない。やがて日本の教会にも試練の嵐が吹き荒れて迫害の犠牲者が出るようになるが、その最初が聖パウロ三木を含む二十六人の聖殉教者であつた。この殉教者達は、大阪で捕えられ、京都へ送られてからは長崎への死の行進となるのだが、その道が西国街道であつた事は歴史の本に書き残されている。十二才から十六才までの少年を混え、その人達は京都で町中を引廻わされた後、堺に下った。そして一行は次いで尼崎を経て西宮で一泊し、更に兵庫から、播州路へと重い足を引きずって、歩かれた。その西国街道は今でも厳として神戸の街を縦貫して通じている事を私達は深く銘記せねばならない。これは尊い聖人達の足跡である。

私は最初、二十六聖人が長崎へと引かれて歩かれた道は当然阪神間に通じている旧国道だと信じていた。その旧国道が即ち西国街道そのものだと思っていたのだったが、実は最近に至って実に全く意外な事実を知ったのだった。それは、神戸市内を通っている旧国道の跡が僅かな部分で私には判明しかねるケ所があつたので、それを確かめるために先程、私は神戸市役所内の市史編纂室を訪れて資料をみせてもらった。旧国道に関する限り、それは殆んどの部分が私の思っていた通りだったが、意外な事実を知ったのは、この旧国道は明治国道とも言われて、明治の初期に国費で開かれたもので、昔の西国街道は又別個の場所だったことである。その西国街道もハッキリ判った所もあり不明の所もあるのだが、魚崎、住吉、御影、大石のあたりではかなり明瞭だった。そこでこれを辿ると、実に思いがけぬ事実にごち当たった、というのはそれが住吉では丁度、吾々の住吉教会の北側の道がそれだったことだった「全くこれには私は驚いた。住吉川を越えて(そこに今は橋はないが、昔はあつたものらしい)西へ下り、住吉小学校の南側を通り、住吉教会の北側を通ってまっすぐに阪神の御影へ、神戸大(昔の御影師範)の南を西へ、

そのはずれを北により、初めての筋を西へ、石屋川を渡り記田町の南を西進して大石川に出るという道順がそれである。こう聞いてみると、なるほど私も幼い頃に昔大名が通った道と教えられていた道があったが、記田町附近で丁度それに当たっている。

住吉教会の正門の前の道がそれだときいて私は今更ながら、その奇縁に驚き、且つ聖パウロ三木の御導きがこの教会を建てさせた事実胸を打たれた。今私達はこの道にたたずんで、四百年前のことを臉に浮べ、破衣に身を包み、難渋しつつ歩まれた二十六人の聖なる姿を思い起して目頭があつくなる思いになる。神戸市を縦に貫いていたこの古い道には今では人家が立並び、自働車が溢れて、その排気ガスで人も息苦しい有様となったが、しかし信仰の自由を与えられている今の我々の幸せを思うとまことに勿体ない感にうたれるのだ。神戸市内にはキリントンの遺跡は何一つ残っていないが、吾々はこの立派な足跡のあることを忘れず殉教者達の信仰を学ぶべきだと私は思う。これが神戸にのこるカトリックの最初の模範的事跡と言える。

## 幕末開国以後

### —最初の宣教師神戸に上陸—

明治の黎明を迎える頃浦賀の港に入ったペルリ提督の卒いる黒船がブツ放した大砲に鎖国の夢を破られた幕府が、世界の大勢に押されていよいよ開国に踏み切ることになるが、横浜と神戸が港を開いたのはその時である。記録を見ると神戸のそれは慶応三年(1867年)の事であった。即ち今から98年以前の事で、その頃又長崎、新潟、函館も開かれて、外人も居留することになったが、当時いち早く禁教令下の日本に再びキリストの教えを復興させようと、なみなみならぬ辛苦を重ねてフランスからはるばる危険な日本へ命を賭して勇敢なカトリックの宣教師が海を渡って来ていた。それがプラール神父や、プチジャン司教を初めとする巴里外国宣教会(ミッシェン、エトランゼール、ド・パリ)の諸神父達であって、長崎、横浜、函館について神戸にはムニク神父が(1868年6月)に上陸して来た。幕府は外国人の住む土地を居留地と称して、特別の一区画内に指定したが、神戸では今まで元居留地と称されていた所で、それは大丸北側道路より南側市役所電車通(フラワーロード)より西側、又西の方はメリケン波止場、鯉川筋の一線までの区域であった。最初ムニク神父は旧街道にあたる今の元町通りにささやかな家を手に入れて、そこに礼拝所を作ったのが、神戸に於ける教会の始まりで、慶応四年(1868年)6月に最初のミサが挙げられた。けれどそこはいかにも手狭であったので、次いでユニタ神父は少し広い所をさがした結果、生田警察署の近くに一つの貸家をさがしそこに移って、そこで居留地が地均し工事を完成するのを待って、その年の9月に仲町三十七番地の敷地を手に入れて、聖堂建設の準備を進めることになった。元町及生田警察附近の教会所の位置は今では目印もなく定かではないが、仲町の位置はもはや明瞭である。それは今の大丸百貨店の南側一部分とその以南次の通りまでで広さは469坪あった。ここで先ず司祭館が建てられ、次いで聖堂が建設されたが、明治三年(1870年)に完成、4月の復活祭に献堂式が行われ、「聖母の七つの悲しみ」にささげられた。この聖堂は当時外国建築物の中では最も大きなもので、ステンドグラスもまばゆく、飾り付けも立派で、360人を収容できる大きなものであった。敷地の正門は南の道に面し、門を入った突き当りに聖堂は南面して建てられていた。聖堂の全体の形は平面図でいうとローマのバジリカと同じく十字形をなしていた。そしてオルガンは十字架の横木の部分にあたる場所に置かれ聖歌隊はその所で歌って居たことを私は記憶している。内部は中央部が畳敷きで両側に椅子席が設けられていて日本人は畳に座ったものであった。

## 最初の修道女来る

この年の12月にはムニク神父は副司教に任ぜられたが、惜しいことに翌年十月急死されたのでその遺骸は最初の神父として、その祭壇の下に納められた。そこで後任にはヴィリヨン神父が当られた。最初の頃は勿論日本全体は一つの教区として司教は一人であったが、やがて横浜を中心とする北緯教区と大阪以西の南緯教区の二つに分たれ司教は二人となった。「ヴィリヨン神父は奇行をもって聞えた人で、カトリックの良寛さんとも言える神父さん。熱烈な布教心に燃えた人で、明治十一年頃にあの布教困難だった時代にすでに一年間に236人も日本人信者を作って居られる。神父さんはまた明治十年にフランスより修道女を招く事を考え、司教に要請して孤児院を建てたが、それは教会の北側、今の大丸百貨店のある場所(裏町四十一番地)で、幼きイエズス会のフランス人一修道女がその任にあたった。それより先大阪の川口に孤児院を開いたベルナルジュ童貞も同じ修道会でこれが関西に来た修道女の最初の人だった。しかしヴィリヨン神父は明治十一年には京都に初めて教会を開くため、特別の命をうけて神戸から転出されたのでその後任には、シャトロン神父が主任となられた。シャトロン師は明治二十九年(1896年)までこの教会を司牧されたが、ワスロン司教が急逝されたので、その後任としてローマ教皇より司教に任命され大阪川口司教座教会に転ぜられ、その後には、備前福山で熱心な伝道に従って居られたファージュ神父が着任された。師は25才新進気鋭の神父だったが、仏語の外、英語にもたけ外人司牧には最適とされて歓迎された。当時、居留地教会には、外人信者が140人、日本人信者は約400名居り、これまた新進のペリン神父がこの日本人のために働いていた。

## 日本人のための最初の説教所

ペリン神父は増加して来る日本人信者のためになんとか独立の一教会を作りたいと念願していたが丁度明治十八年(1885年)に多聞通鎮台筋(今の有馬道の一つ東の筋)に六畳の空家があったのでこれを借りて伝道場として布教運動を始めた。当時外人は居留地以外には住むことが出来なかったのでペリン神父は毎日居留地から通って、日本人の生活に溶けこんで仕事に専心した。明治二十九年(1896年)には兵庫区西出町四七八番地に稍広い空家を見つけたのでここに移転することとなった。明治六年禁教令の解除があっても日本人民衆はキリスト教に対して理解に乏しくむしろ反対の気分を持つものが非常に多く、ペリン神父の布教はまことに困難をきわめた。多聞通の教会では漸く信者15名位しか出来ていなかったがペリン神父は西出町教会が開かれてからは戸別訪問を行って、信者の獲得につとめた。と同時に、同師は社交の必要なことも痛感し神戸各界の名士等とも親交を深めることに努力した。そして兵庫県知事、神戸市長、神戸税関長、裁判所長、商業会議所会頭、郵便局長等と図って神港クラブと称する内外人の社交機関を作り宗教と政治には触れずに交際された。

ペリン神父はまた永年に亘って神戸高等商業学校でフランス語の教鞭をとっておられ、また神戸で著名の名士にも個人的にフランス語の教授などを行い、上層社会に知己は多かった。上層下層を通じてのペリン神父の努力は漸くその緒につくことになるが矢張り時日の経過は絶対に必要であった。西出町の教会に通っていた私の兄の思い出によると、それは今の市電西出町の停留所より少しく東方七宮神社の向いを入った辺りにあったらしく、今の新開地本通りはその当時湊川の水が南に流れていた川原で停留所の所には橋がかかって居り、その橋を渡って日曜日教会のミサに行くと語ってくれていた。

ペリン神父のたゆまぬ努力は、それでも着々と成果を挙げでいた事は確かで、仲町の天主堂も外人及日本人で毎日曜日のミサに漸く手狭まになって来たので、神戸にどうしても日本人専門の天主堂の建設が必要が痛感される事になって来た。多聞通り、それから西出町にて教会を作って来たが、なんとしても大きな聖堂がほしい。ペリン神父はこれを自分の畢生の宿願として営々働いて来られたわけだった。そのためには土地と、資金が必要だ。

## 聖アントニオのメダイの導きで 土地を入手

先ず土地を求めるためにあらゆる方面に連絡をとっていたが丁度その頃「下山手の監獄(刑務所)が移転した跡に空地があってそれが師範学校の予定地になっていたのが、偶々、変更となり御影に建設されることとなったため、慈善事業または学校団体に払下げられる事となった。これを聞いた師は早速運動を始め、知事、市長に請願書を提出したが、その決定が官の都合にて仲々進捗せず難渋したのでペリン神父はシャトロン司教のすすめで、落し物や希望したものが自分の手に入って来ることを守って下さる「パドアの聖アントニオ」のメダイをひそかに監獄跡の土地で投げておかれた。そうして毎日の祈りの中で、この土地が一刻も早く神父の手に入るように念じて居られた。その間のペリン神父の焦燥は想像するに難くはない。

けれども神は師の熱意を見捨てることはなかったのである。その払下げの最終的決定がなされたのは二年後の明治三十四年(1901年)の4月で、くしくもシャトロン司教の霊名の祝日だったという奇縁にめぐまれた結果となった時の神父のよろこびは実にたどるものがなかったのであった。このメダイの導きによって土地を入手した事はペリン神父が後年私のようなものにも語ってきかせて下さったほどに、生涯忘れられぬ事蹟となったのである。

この土地は現在、下山手教会が存在する場所そのもので、広さは1500坪で一段高い高台になったその上だった。そこで約千坪は神戸女子教育院の孤児院と幼稚園との用に充てるため、フランスの修道女会「幼きイエズス会」が受入れ、600坪は教会堂建設のために教区がこれを受入れた。そこで早速、司祭の住居である司祭館が建築されることになり工事が初められたが、その年の11月にはすでにその祝別式が行われ、ペリン神父は5年間住まれた西出町の教会を出てここに移転されたのである。そしてこの時初めて門の入口には立派な「天主公教会」と真新しくかかれた看板がかけられ、日本人のための聖堂建立の一步を踏み出しのであった。そして続いて伝道場の建築も進められ、翌明治三十五年(1902年)には四十二坪弱の平家建日本家屋の伝道場が完成した。ここで毎日のミサが挙げられ、日曜日には多数の日本人信者が集まった。それは仮聖堂ではあったがこの時、師が日頃敬慕された「聖家族」に奉献されている。この建物は後々までも伝道場として残り、信者の集り場として永らくみなに親しまれたが腐朽がひどくなり今年春、とりこわされてその後新しく鉄筋造りの幼稚園が建てられたのは今見る通りである。

## 日本人の聖堂初めて完成盛大に献堂式

仮聖堂は出来たがペリン神父の夢は尚立派な聖堂の建設へとひろがっていた。日夜そのための祈りと努力がつけられていたが約8年間の辛苦がみのったか、或る日、フランス国から思いがけぬ寄付金が贈られることになったのである。それは師の親友であるコンパニオン神父を通じてヘンリゴ・ドバルディ

男爵から一万フランが届いたのである。ペリン神父のよろこびは察するに難くない。それに加えて某アメリカ夫人より一千ドル、及びマルナス神父等より三千円の寄付があり、又その外ペリン神父は日頃自分が神戸高商の教授をして得られた報酬などをすべて貯金されていたのでこれらを合すと聖堂建設には十分な資金となっていた。ここで漸くその建設工事にとりかかることとなり、明治42年(1909年)にはシャトロン司教によって定礎式が行われ、それより18ヶ月を要して翌年完成、9月18日には盛大に献堂式が行われた。その時の模様を当時の「声」誌に報ぜられた所から抜率すると「……下山手天主公会にては新たに聖堂の建築成り、霊父三十余師を迎えて祝別式挙げられたり、司教閣下は、聖堂内外を祝別せられ、次にワグネル師の説教あり、ミサ聖祭中司教閣下は日仏英三ヶ国語にて親論を賜り、後、教父陛下の祝福を下されたり。式後、信徒一同茶菓を受けて退散す、……当教会は当市に名高き諏訪山公園に近く、神戸停車場と隔てること相等しく、殆んど市の中央に位し仰げば近く北に鬱蒼たる六甲山脈を望み、俯せば南に洋々たる内海を望む、高燥閑雅他に多く類を見ざる勝地なり……」とある。

明治43年というと、神戸に市内電車が初めて開通し、春日野道から兵庫迄走った年である。市民も市内の高台に新しい赤煉瓦造りの壮麗な聖堂を仰いでそのエキゾチックな姿に驚嘆したことであろう。その姿は今も下山手8丁目市電停の北側に巖然としてペリン師の風格を表わすかの如くに聳立している。聖堂の広さは奥行十八間、間口七間、高さは九間で屋上の十字架は巨大な石にて刻んだもので、内部正面には美しい聖家族その他のステンドグラスが入れられ、当時としては誠に壮麗なものであった。そしてこの聖堂は仏国の寄付者バルディ男爵の名をとって聖ヘンリー皇帝証聖者に献げられた。

## ペリン神父の偉業

これで神戸市内には二つの聖堂が出来たわけで一つは居留地仲町の天主堂で、それはその時から専ら外人専用のための聖堂とされ、日本人はみな下山手天主堂に参詣することになった。その当時の教会所在地は大阪以西では神戸下山手だけで、岡山までは一つもなく、従ってペリン神父の受持小教区は兵庫県全域、及鳥取県の全域に及んでいた。そのため同師は交通不便の中を、徒歩で又或る時は馬ののって巡回して布教に従事されたがその困難は想像に絶するものがあつた。後年しばしばその思出を私は同師から聞かされたことがまだ耳にのこっている。鳥取県の山奥を十数回にも亘って歩かれて伝道されたことはさすがに健脚で頑丈な師でなくては出来ない仕業であつた。

かくてペリン師は昭和十四年(1929年)8月21日82才を以って帰天されたが叙品後の55ヶ年間を一回も帰国されることなく、全く日本の神戸市のみ滞って生き、布教された事は巴里外国宣教会の司祭としても珍らしい異色の存在だったと言える。下山手教会で同師が洗礼を授けた日本人の数は実に1500名にも達し大きな足跡を残されたが中でも親しく薫育された信徒の中から今日二人の司教(古屋義之京都司教及小林有方仙台司教)を出されたことは師の感化がいかに大きな力となっていたかがうかがえる。また司祭、修道女等の聖職者も数多く出ているのは勿論の事であつた。師逝って正に巨星地に落ちた感がしたが、昔の神戸の信者にとって、下山手教会はペリン神父であり、ペリン神父はイコール下山手教会と、両者一体であつて分けて思い浮べることは出来



ぬものであった。

## 中山手教会の誕生

一方下山手教会以外の情勢はどうであったか。居留地の仲町の教会はシャトロン神父が司教となられてからはファージュ神父がその後任となられた事は前述した。師はまことに温容潤達之士であり、ユーモアのある人徳はよく、神戸在住の各国外人間に好印象を与え、明治二十九年にこの教会の主任となられてから、この教会一筋に生き、而かも大阪教区の会計担任として、又後には副司教としてその全生涯を送られた。

明治も終り、大正の年代に入ってからには神戸も次第に発展して居留地の地区も外国貿易の中心と化し、外人達は仕事の場所として居留地に業を営んだが、外人の内地雑居も認められるようになってからは、その住所を閑静な山手の地に変えるものが次第に多くなり、北野町、山本通り辺りはむしろ外人の居住地の感を呈して来た。そこへ仲町の天主堂も、建設当時の荘麗さも次第に褪せて地震、白蟻の害なども加わってもはや老朽化したのでファージュ神父はこの移転を考慮せざるを得なくなって来た。そこで土地を求めた所、中山手一丁目の現在の教会場所にさがし当てたのでそれを購入し、大正11年に工事を起し、翌12年12月目出度く竣工、二つの鐘塔を有する壮麗なゴジックの堂宇が山手に聳えて神戸港を限下に見下ろすことになった。その献堂式にはカスタニエ司教が当られたが、自分が叙階後、初めての献堂式として歓喜に満ちて祝別を行われた。そしてこの聖堂はイエズスの聖心に献げられ、聖心の美しいステンドグラスが正面祭壇の上の窓に入れられた。内部の広さは奥行18間、間口7間半で、大阪教区内の聖堂としては京都三条河原町天主堂に次いで二番目の大きさだった。

## 修道女たちの献身的活動

又神戸には二つの教会の布教活動以外にカトリックの社会事業が着実に地に根を下ろして活動をつづけていた事は見逃すことが出来ない。それは前述の居留地に教会があった時にヴィリヨン神父の奔走でフランスから呼びよせられていた修道女の一団、即ち幼きイエズス会の童貞さん達が教会の隣接血（今の丸大百貨店の位置）に修院をおいて孤児を養っておられたが、ペリン神父が下山手の高台に教会の土地を手に入れた際にその北側半分に移転して建物を建て、ここで更に孤児院を大々的に拡張、神戸女子養育院と称し、アントニン院長を中心として数名の修道女がその仕事に従事した。その後この孤児院は神戸でも著名の存在となり、何回となく表彰され、またアントニン童貞には褒章が贈られ、天皇陛下よりも御下賜金を数回受けている。また一方、下山手一丁目八番にも同一会の修道院が建てられ数名の幼きイエズス会修女がそこで外国人の子供のための小中学校を経営しセントメリー学園と称して教育に没頭していた。教会内部ではその時代に番地でその修院のグループを言い表す習慣があつて、居留地にあつた時は童貞さんは41番地に住んでいたために「41番の童貞さん」と呼び、またセントメリー学園は8番地にあつたため「8番の童貞さん」と呼んでいた。8番は土地も広く、中でも特に美しい庭が、傾斜面にあつて聖母聖月ともなると美しいさつきの花が咲きみだれ聖体の祝日には必ずここで聖体行列が行われて信徒多数が集まり、美しい雰囲気をかもし出していたことを私は今でも忘れられない印象として憶えている。而しこの「8番」は戦後、兵庫県農業会に売却され、現在では7階建ての農業会館が建て、すっかり面目を変えてしまった。最も今日では周囲は繁華なバーやキャバレーに場所を占領せられ

て修院であるためにはあまりにも俗化してしまったのにもその存在価値はなくなったと見るべきであろう。今日では神戸地区にも各種の修道女会があつて働いているがこの幼きイエズス会修道女会が明治・大正を通じて京阪神に活動した唯一の女子修道会で日本の社会事業につくした功績は大きかった。今は宝塚市鹿塩に本部を移し、神戸では北野町二丁目に修道院を持っている。

## 鷹取教会を新設

再び話は下山手教会に戻るが、ペリン神父の営々たる布教事業によって信者は次第に増加して、昭和の初年頃にはすでに千数百名にも上ってさすがの大きな下山手天主堂も手狭になり、クリスマスや、御復活祭には信者は聖堂に入り切れず後部入口にギッシリ立ちつくすと言う有様、かつて古屋義之京都司教及故都田耕造神父の叙品式が下山手教会で行われた節などは各地から来た信者も入れ、参列者は下駄、靴を手に持って聖堂で身を動かすことも出来ぬほどのすし詰めになっていた事を思い出す。こんな状態となっていたので、神戸市内にいま一つの教会の必要性が痛感されていた。そこでカスタニエ司教は下山手よりも西の方面で教会設立を考えられた結果、長田区海運町三丁目に土地を求めて鷹取教会を創めることを決意された。よってこれが公時に着手し昭和二年（1927）4月には木造平屋建の教会堂が出来上がり、聖ペトロを保護の聖人として献堂式を挙行了。そこで市内の信者で西部に住む人達は下山手より離れて鷹取教会の所属となった。その数は百数十名で、初代の主任司祭はそれまで下山手教会でペリン師の下に助任をつとめられたジュビア神父であった。

## 住吉教会の創設

それより先、阪神間の中間的場所として西宮が着目され、阪急夙川の地にブスケ神父の努力によって教会が設立されて居り、住吉川まではその区域になっていて、すでに下山手教会から分離独立して居り、又姫路にも、教会が設立されていて下山手から分離されて下山手の区域はかなり縮小されていた。昭和10年になって、神戸市の東部にも増加してくる信者のため、また将来の発展性も考慮に入れて新しい教会が必要となっていたので、カスタニエ司教はその候補地として御影町附近を指定し、鋭意土地を求めた所御影町申御田に日本家屋を見つけたので仮教会をここに作り、翌年11年には更に新しく住吉村丸の後に1200坪の土地を購入して聖堂建設にかかった。これが竣工したので献堂式を12月13日に挙行して、日本の聖人聖パウロ三木を保護者と定めてこれに献げ、初代主任にはメルシエ神父を推された。

ここでこの教会は東の方は夙川教会の地域を譲り受け西部は下山手教会より移譲を受けて独立することになった。

## 六甲教会の創設

また、独乙系イエズス会では教育機関として東京に上智大学を持つだけであったが、関西進出を考え昭和初年頃より六甲山中腹に、男子の中等教育機関として六甲学院を開設した。武宮神父を校長として独特の厳格な教育方針をもって阪神地方の子弟の教育に注目されたが、学園を中心としてぼつぼつと信者も増加して来たので附属礼拝堂では不備となったため、二つの小教区教会を設立することになり司教の



承認を得て先ず最初灘区篠原北町一丁目20番地福島作市郎氏方に仮教会を設置して昭和23年10月4日初ミサを挙げたのが六甲教会の初まりである。その後篠原北町一丁目40番地の岡山大子さん方に移され、次第に参詣する信者の数も増加して来たので、本格的の聖堂建設の必要が感ぜられて来た。そこでイエズス会では新たに赤松町の現在の場所に土地を購入し昭和27年春より建設にかかり、翌昭和28年春完成したので5月の吉日を期して献堂式を挙行し、無源罪の聖母に献げられ田口司教の手によって新聖堂は祝別された。最初よりブラウン神父が主任となり、昭和38年まで在任されたが、それより二代目ピーター神父にゆずり、現在同神父が主任司祭となっている。

神戸市内の教会は凡て巴里外国宣教会の司牧に委ねられ、司祭は皆フランス人であるが、この六甲教会だけは、イエズス会の所属で、ドイツ人司祭が司牧している。

## 垂水教会の設立

また神戸の西部はやや辺りの土地であったが、年と共に次第に住宅地として発展を遂げつつあったので教区ではこれに着目、かたがたこの地区の信者の便益のためにも必要性が痛感されたので、垂水町に一つの教会を設けることになり、昭和17年(1942年)10月西垂水町端ヶ丘961の地に土地を選び教会と司祭館を設置した。初代の主任司祭は福田豊神父が当たっている。その後昭和21年(1946年)には主任神父ベルゼス神父の手によって80人を収容できる木造モルタル塗りの聖堂を建設した。またそれからこの教会は次第に信者数も増加してきたので、昭和35年頃に至り、時の主任司祭タベルニエ神父は、新聖堂建設を企画し、一時仏国へ帰られて種々努力の結果、募金に成功し、垂水信者の協力もあって、昭和37年(1962年)に建設工事に着手、十二月には鉄筋コンクリート造の近代式聖堂を完成、12月8日、聖母無原罪の祝日に田口大阪司教の司式により盛大に献堂式を挙行された。昭和40年現在信者数は413名を数えている。

## 忘れられぬ戦争の犠牲

垂水教会が創設された頃は、日本は日支事変から、大東亞戦争(太平洋戦争)へと突入し、昭和16年12月8日(聖マリアの無原罪の祝日)には米国を始めとする連合国に対する宣戦布告がなされ、その未明には、真珠湾の攻撃が開始されたのだった。それと同じ日にマレー半島には日本軍が上陸、破竹の勢いでシンガポールに攻め入り、これを陥れ、東南アジアの重要な都市はすべて日本軍の占領下に収められ、ニューギニアは言うに及ばず、ほぼ3年に近い間に、皇軍は遠くビルマからインドの国境にまで進出、至る所連戦連勝の戦果を挙げ、国民のすべては戦勝の歓喜に酔っていた。しかし、敗退した米英を主とする連合国軍はいつまでも、そのまま引き下がって行く筈はなかった。やがて自らの国内の軍事力の充実に成功した米国は、俄然攻撃に転じて日本軍へと反撃を開始することになってくるのである。

日本軍の最初の敗退はニューギニアのガダルカナルに始まった。そして次いで、ミッドウェイの大海戦の敗北によってそれは確実なものとなって来た。昭和20年に入って、米軍はついに日本の国土である沖縄について上陸し来たり、日本本土に対し、至近の距離に迫った彼等は遂に吾等の胸に白刃を擬したのである。その頃になると東京・大阪を始め日本の主要なる年に対し爆撃が間断なくつづけられ、木と紙でつくられた日本の家屋は実に易々として燃えつくされて防ぐに手はなかった。

神戸の市街もその類に洩れず3月頃から、焼夷弾の洗礼をうけつつあった。6月に入るといよいよそれは熾烈となって、5日の爆撃はついに教会の建造物に対してまで被害を与えることになって来たのである。つまり中山手教会がまずその槍玉に揚げられた。

## ファジュ神父殉職

6月5日未明より米軍機の来襲があり、空襲警報が鳴ったので主任ファジュ神父は一同と共に、山手の壕に待避した。すると突如、頭上の飛行機より投下された焼夷弾の幾発かが聖堂に落下し来たった。屋根をぶち抜いた焼夷弾は内部に火をまき散らし忽ち聖堂から白煙が吹き出した。それを見てとったファジュ神父は助任ウンテルワールド神父及伝道士古屋芳之助氏（現古屋京都司教の厳父）夫妻と共に聖堂にとって返して、消火につとめようとしたが、煙にまかれて、思うに任せず。ウンテルワールド神父は漸く聖体を奉持してよろめきつつ堂外に出たが、手足頭面にひどい火傷をうけていた。しかしファジュ神父と、古屋氏夫妻の3人はついに帰らず、焼け落ちた聖堂と運命を共にしてついに壮烈な最後をとげられたのだった。燃え残る火の中、聖マリアの祭壇の前に悲しい三つの遺体がうずくまり、涙と共に収容された。ファジュ神父行年75才、実にその死まで49年間を、居留地教会から中山手教会へ、一貫して神戸外人の司牧につくされて生涯を終えられたのだった。

## 下山手・住吉の戦禍

一方下山手教会ではペリン神父帰天後はウンテルワールド師が主任となったが、やがて都田耕造神父にその任をゆずられていた。その教会も中山手教会炎上と同じ日6月5日に矢張り爆撃をうけた。都田神父は木本伝道婦を励ましつつ聖堂の防御に力をつくし、祭壇に落下した焼夷弾等2ヶ所の発火をいち早く消火し、炎上を喰い止め火災はのがれたが、司祭館に落下した焼夷弾はついに防げず焼失の止むなきに至った。

神戸に於ける爆撃による被災はこれだけに止まらなかった。住吉教会も同年8月6日未明より始まった爆撃によって聖堂は数発の焼夷弾を受け必死の消火も空しく遂に炎上の憂き目に会った。しかし以上の他は神戸市内の教会では著しい被災はなかった。また、中山手教会にては3人の貴い人命が失われたが、下山手教会、及住吉教会では幸い死者は出なかったのが不幸中の幸である。焼けた中山手聖堂は内部と屋根をすっかり失って、ただコンクリートの外壁のみの廃墟となったが、昭和23年復旧に着手、2年を要して昭和25年には祭壇の後部を少しく拡げて現在の姿に建て直されている。下山手教会は、司祭館焼失の跡に、米軍提供のカマボコ兵舎を建て司祭館としたが、後になって現在の所に新司祭館が建てられた。住吉教会は聖堂焼失後、伝道館を仮聖堂として永らくミサが行われたが、司祭、信者の努力が実って昭和31年12月には現在の姿の新聖堂が復興建設された。

## 戦後の発展

さしも熾烈だった戦争も昭和20年8月15日被昇天の祝日に至ってついに終り、日本の敗北となり、平和の光りがやがて国土の上に輝き出すと、日本人々は今度はその精神的より所を見失って虚脱の状態に陥ってしまうのであった。こんな時に戦争中くもらされていたキリスト教の光りがやがて日本の行

く手に一つの燈台として認められるようになってくる。カトリックの活動が活発になり、精神的に飢えた日本人が続々とカトリックの門に集まって来ることになった。復興が緒につくと同時に教会の動きも大きくなり新しい教会が建設され初めて来た。まず芦屋市に教会がつくられることになり、同市平田町の稲畑二郎氏邸に芦屋の仮教会が設けられることになった。稲畑邸は幸い戦災を免れた豪壮な宅であったのでそのサロンに祭壇が置かれ、日曜日には上仲儒利神父が夙川より来てミサを執行され、住吉教会の一部信者はそれに参詣した。それが基となって後程に芦屋公光町(現在の場所)に立派な聖堂が建てられることになったのである。また明石方面にても早くから教会の必要性は感ぜられていたので教区では昭和22年(1950年)8月22日太寺に教会を開設し、初代の主任神父にはジュビア師を推して初ミサを執行した。その後更に広い土地を求めた結果、明石市桜町二番26号にこれを定め、聖堂の建設に当り、昭和31年1月には完成した。

## 市内に3教会増設さる

また神戸市内にも次第に増加して来る信者に対処して、教会の増設が要求されて来たので、まず灘区に設けることが決定された。その場所としては灘区籠池通5丁目10の土地を購入した。この土地は元中国人の豪商、吾啓幡氏が眺望絶佳の山麓に営んだ宏壮な邸宅で、惜しい哉戦災によって灰燼に帰してしまったものであった。そこで教区ではまずその中の上部に焼けずに残った二階建て日本家屋を仮教会として使用することにし、昭和26年(1951年)11月1日、初代主任司祭メルオー神父によって初ミサが上げられた。当初信者は100名であったが、昭和32年(1957年)に至り漸く信者数も増えてきたので聖堂新築を行うことになり、昭和33年4月これが完成したので教皇庁公使フルステンベルグ大司教を迎えて、16日献堂式を行った。時の主任神父はモラ神父であった。

また同じく須磨にも教会が設置されたが、それは同じく昭和26年12月の事で須磨本町44番の場所に日本家屋を求めてそこに仮教会を始めた。初代主任神父はモネ神父、信者数は100名であった。この教会も時代の要求に応じて本教会の設立を行うことになり、土地を須磨区行幸町3丁目28に定めて、聖堂建築にかかったが、これが完成し、昭和35年(1960年)12月献堂式を挙げたが、コルニク神父が主任代理をつとめ、翌年2月には初代主任としてメルシエ神父が就任された。信者数は132人となっていた。

更に下山手教会と鷹取教会との中間の教会として兵庫地区に教会の必要性が認められていたので、昭和30年頃より教会は兵庫区塚本通4丁目5番地に相当広い空地のあるのを見つけていたのでこれを買入れていた。そこに日本建の家屋もあったので最初は下山手教会より毎週神父が出張してミサなど行っていたが、昭和35年(1960年)2月にはジュッセン神父が初代主任司祭として初ミサを捧げている。その時信者の数は205人であった。またこの教会にも本聖堂の建設が要求されていたが、昭和40年には建築に着工し、8月1日には献堂式が行われた。

## む す び

以上列記のようにかくして神戸市内には今日九つの教会が存在して、信者の数も、著しく増加した。神戸(兵庫)開港と同時にムニク神父が上陸第一步を印して布教を始めてから、本年にて丁度97年を迎える。その間神戸の地区は終始一貫して仏国巴里外国宣教会(ミッション・エトランジェ・ド・パリ)の宣教

師に司牧されて来ている。今日の日本カトリックの開花の基盤はすべてこの会の会員達の努力の賜であったことは吾々日本人として忘れられない所である。しかもその人達は遠く故国をはなれ、苦勞しつつ日本語を習い、日本人に教えをのべ、最後は日本の土となって帰天する決心をもって来ているのである。日本人から見れば何と尊い事であろうか。最近になって受洗入信された方の中には、この辺の事情をあまり知られない方が多いと思われたから私は敢えて筆をとってこれを明かにする必要を痛切に感じた次第であった。

外国より渡来している宣教師の使命は、その国に教えをひろげると同時にまたその国人の中より司祭を養成して、将来はこれらの邦人司祭に、その国の信者の司牧を任せるのが仕事である。現在では日本に十五人の日本人司教があつて管轄して居り、邦人司祭もおびただしい数になっているのも皆凡て、元はと言えば巴里ミッション会の縁の下の力持ちによって出来た事であった。この機会に私達はこの宣教師たちの精神をくんで、邦人司祭の養成に力を入れるべきであると思つている。(終)(教会委員)



## 住吉の思い出

### ベロー神父

住吉教会の思い出について何かと書くように求められましたが、実は少し当惑しております。それには理由が二つあります。先ず、年と共に輪郭のぼやけてしまったのがあつて、これを書き表わすのは難かしいことでしょう。もう一つの理由は、思い出があまり沢山あることです……。そのうちのどれを、ここに書いたらよいか、本当に迷ってしまいます。偶然な出会い、一つの言葉、一つの石、一本の木、などから思い出が浮んで来て、誰かの顔が現われたりします……。こんなことをこれから少しのべてみようと思つています……。

教会の、一つ一つの物には、それぞれのお話があります……

先ず、いつか持ってかえつてきたあの二本のヒマラヤ杉があります。あれからは、14年も過ぎたのです！それは日曜の午後のことでした。その時私はまだ甲南病院の裏を知りませんでした。私は数人の子供と（彼らは皆結婚しました！）一緒に、出かけました……そしてこの遠足で、私は極く小さいヒマラヤ杉（高さ5センチ）を5本持ってかえりました。うち3本は枯れ、あとの2本は少くとも3回は植え変えられたにも拘らず、現在殆んど5メートルに成長致しました。私にとって、この2本の木はいろんなことを語ってくれます。ある日曜の遠足だけでなく、その杉の間から私にはいろんな人の顔が思い出されてきます。いろんな人の名前が浮んでまいります……。

また、ルルドの洞窟の石があります。前方に見える立派な石ではありません、後の方で壁をつくっているあの見えない石です。その石の一つ一つにはお話があります、そこには血と汗さえあるのです……私を手伝って下さった方達は覚えているでしょう、しかしそのうち、3人の信者が天国へ旅立ってしまいました。この3人はきっとマリア様から御札を言われたことでしょう。見えない石なんて、たいしたものではありません……それでもその石について少し話したいと思つています。

市が、道路の幅を広げた時、教会の土地を大分削られました。その代りとして、教会の今の神父館の西にある畠をもらいました。

……それは戦後のことで、その畠の真中には、瓦や、コンクリートのかけら、それに空襲で死んだとい

う馬の大きな骨さえ混って、山ができていました。私はここを少し整理しようと思って、穴を掘りました……穴を掘ると、時には宝物を発見するものですが……。宝物の代わりに、私は古い川を見つけました。きちんと三角に削られた立派な石が、川の兩岸に沢山ありました。その時は、夏でしたので、夜になると近くの信者があつまって、仕事を手伝って下さいました。やがて、美しい石の山が出来ました、その時ふと、私はこれでルルドをつくることを思いつきました。この石は全部、ルルドの後の壁に使用されました。

それ以来、ルルドの前で祈る度に、私は当時信者と一緒に働いたあの日々を思い出さずにはられません。私は前の方の石だけを見ているのではありません、後の見えない石のことを考えています。その度に、私を手伝った人々、生きている人も、亡くなった人も、一人一人の顔が私の眼前を通り過ぎるのです。それから、道路を広げた時に移動された爽竹桃があります……。経済的な理由で植木屋を頼むことができなくて、私は青年達に助けられていく日もこの仕事につかいました。一緒に働いた青年は覚えていないかと思いますが、そのうちの一人が（今は結婚して父親になっています）、私は“サムソン”というアダ名をつけました……。この人は旧約聖書をよく読んでいたと見えますが、……  
今でも忘れないでいてもらいたいものです！！

他に、教会に活気を与える沢山の木があります……。これらの木は、私にとっては唯の木ではありません。その中には、いろいろな人の顔や思い出がかくれています。勿論これは木と私との秘密ですから、木の秘密を語る訳にはゆきません。しかし、

— この木は、神様に感謝するために、ここに植えられた……

— こちらの木は、ある結婚記念のものです……

— こちらののは、マリア様を讃えて植えられました……

— この小さな赤い花は、ルルドに色をそえるためにと、ある土曜日の夕方持ってきていただいたものです……

こうしていくらでものべることができますが、とても書ききれません。それに、司祭として語ることのできないこともあります……それは神様とマリア様に申しあげれば十分でしょう。 .

また、皆さんが教会のためになさった数々の賜物があります。大きいのも小さいのも、品物もあれば現金もありました。30年の間、信者の心づくしは蓄積されております。そのうちのある物は神父と一緒に教会を離れたでしょう「ある物は残っているでしょう。しかし変らないのは、神様が総てをよく知っていることです。誰がこのテーブルを、この椅子を、このコップ、この灰皿、を持ってきたのか、神様はご存じです。

信者の努力によって、教会は現在の姿になることができました。私達の後に来る神父達は、あるいはあなたの方の名前を知ることがないかも知れません。しかし神様は知っています。皆さんが神様の家と、神父達のためにつくして下さいましたことを、神様は知っています。

私が残念に思うのは、細かいことをいちいち思い出せないことです。記憶に深く刻まれた思い出もあれば、私の守護の天使の持っている私の生涯の本に書きこまれた思い出があります。天国で再会した時に、私はきつともっと正確に、一人一人に感謝をのべることができると思います。私の回りに見える総ての物に、顔がかくれています。その顔は生き生きとして、あなたの今の顔でなく、当時のままの顔なのです。12年前の台風の時の人々の顔、慰めに来た信者の顔。その二日後、屋根のない聖堂の御ミサに集まった人の顔、被害を修理に来た人の友情に満ちた顔。御聖体を持って行った時の病人の顔。公教要理

を勉強していた貴方の顔。子供を亡くした母親の悲しみに満ちた顔。私を誤解した人の厳しい顔。これらの顔は、皆大切に私の心の中にしまわれていて、毎朝、神様にお見せしているのです……。

ながいおしゃべりをお許し下さい。信者と神父の30年間の努力……神様はよく認めて下さるでしょう。皆さんに神様の祝福がありますように、喜びが与えられますように祈っております。皆さんに申し上げたいことを全部書いたら、おそらく一冊の本になるでしょう。とてもここに書きつくせませんが、総てを御存じの神様は、貴方のことを忘れません。……私のためにもどうかお祈り下さいますように。

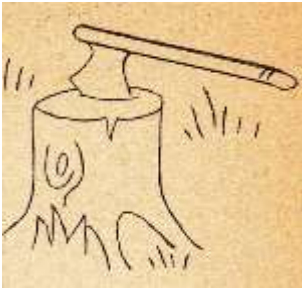
住吉にて

1965年10月18日

(現主任司祭—8代目)

## 男女関係の変遷

教会での男女関係のあり方のうつり変わりも大きなものがある。「男女七歳にして席を同じうせず」は教会でもそのまま30年前までは厳重に守られた。一例を聖歌隊にとってみると、ペリン神父は男女合唱は絶対に許されなかった。男は男だけの聖歌隊(女は女だけの聖歌隊で全く別個の無関係、しかもミサ中でも、男は2階に席をとり、女は階下に席をとり、交互にグレゴリアンを歌うのだ。勿論稽古は全然別。それでもうまくやれた。今は青年でも男女は一緒に何んでもやるが昔は、男女が共には何も出来なかった。ピクニックなど全く以っての外。時代の変化も恐ろしい。



## 住吉教会と私

### 思い出すままに

#### デーラ神父

住吉教会の主任神父は創立当時はよくわかりました。その頃大阪教区の司祭は全部で30名位だけでした。その中、邦人司祭は16名(永田、浦上、山中、都田、古屋(孝)、小林の各師)ミッション会の司祭は25、6名でそれも大方が年寄りでした。また最初の頃の大阪教区の管轄区域は三重県の桑名から山口県の下関までで、非常に広範囲でしたから誰か司祭が一人病気になるとか休むとかの時には、すぐに若い司祭の大活躍となっていました。ある日曜日、御ミサのために大阪の川口教会から和歌山に行き、そのあと津教会、伊勢山田、四日市、桑名と次々に6ヶ所も飛び廻ったことがありました。またその頃は司祭の移動も激しく、3年間に小林神父様(今の司教様)は6回、私は3回もかわりました。一私は司祭になってからマンー半島のビナン神学校で4年半哲学を教えた後、布教活動にたずさわってもよいと云う許しを得て、日本へ向けて出発し、昭和10年12月、神戸に着きました。御影教会(住吉教会の前身)はその年の4月に創立されたばかりで阪神御影駅の近くの仮の教会でした。カスタニエ司教さまによって私はまずこのメルシエ神父様を、私が先輩の神父様方に挨拶して廻るための案内役にされ、メルシエ神父様につれられて、あちこちの教会を廻り、その夜は御影教会に泊まりました。日本語の勉強は鷹取教会のジュビア神父様の許で指導を受けました。日曜日には中山手教会へ行行ってファジュ神父様を手伝い、朝遅い10時半の御ミサを立てていました。午後は時間があつたので阪神電車で御影に来、メルシエ神父様と散歩していましたが、御影に着く頃は大きい日曜学校がまだ終わっていませんでした。先生は尾形竜子さんのお姉様で今聖霊会のシスターになって居られる中村文子さんや時には和田実伝道士も教えていました。日曜学校が終わるのを待ってメルシエ神父様と散歩に出かけ、よく甲南病院の方まで歩きました。(あの頃バスがありませんでした!) 団地もなく静かでした。東へ廻り住吉川に沿って帰っていましたが水害前まで川べりには松の木が沢山ありました。昭和21年大阪川口教会のビロース神父様が重病になられたので、カスタニエ司教様がそこの主任司祭を兼任され、非常に多忙になられたため、私は川口へ呼ばれて、日本語の勉強を続けながら少しずつ布教にたずさわるように言われました、阪大病院に入院して居られたビロース神父様に毎日ご聖体を持って行きました。

ビロース神父様はだんだん快くなれましたが、今度は南田辺教会のベック神父様がパリ神学校の先生となってフランスに帰ることになりました(昭和11年4月頃)。南田辺教会では近くにある愛徳童貞様の修道女のために誰かが毎朝御ミサを立てなければなりません。それで司教様は私を、まだ日本語がとても不十分でしたが其処へ任命されました。主任司祭としては堺教会のセツール神父様でした。セツール神父様は月に1回、日曜日に私と交替して南田辺に来て居られました。南田辺の信者はその時に神父様に色々相談が出来ました。またセツール神父様は毎週一度愛徳童貞会に来て居られましたから、その時教会に集まって私のためにむずかしい問題の解決など力をかしてくださいました。

こうしている中、夙川教会の永田神父様がミサ中突然倒れて急逝されました。カスタニエ司教様は色々考えて次の異動を決められました。メルシエ神父様を夙川へ、私を住吉に、ウンテンワルド神父様を田辺に。このようにして私は初めて住吉教会の主任司祭となりました。(昭和12年)

2回日は昭和18年、3回目は昭和29年。病気のあとフランスから帰った時でした。田辺にいた時は、

カスタニエ司教様のプランで毎日中村伝道士と日本語の勉強をしていました。日曜日の説教はまずフランス語で書き、中村さんが翻訳するのを暗記していました。住吉に来てからも和田実伝道士と同じようにしました。月曜日に説教の原稿をフランス語で作って、それを和田さんに渡して、和田さんが翻訳したのを暗記していました。また他の日は毎日午前中は日本語の色々な勉強、午後は和田さんと信者の家庭訪問という日課でした。

その頃住吉教会の所属区域は東は今の芦屋市の西から、西は六甲の都賀川まででした。それで六甲道まで国電で行きそれから大分上まで歩いて廻りました。日曜日のごミサに与る信者の数は凡そ3～40人でしたでしょう。川端さん、椎山さん、近藤さん、松本さん、熊沢さん、青木さん、市野さん、難波さん等、それにフランス製の自動車に来ていた小高さん。御影教会は下山手教会と夙川教会の境で両方の教会から半分ずつ集まって出来た教会ですからまだ昔の古巣の夙川や下山手に行く信者もありました。非常時の始まる頃でした。

その頃、盛んだったのは聖歌隊でした。和田伝道士、榊原、村上さんの3人は共に暁星学院の出身でしたからグレゴリアンに大変興味を持っていました。村上さんがリーダーになって、姉妹会の人達も大勢加わって立派に歌って居りました。オルガンは中村文子さんが弾いていました。御ミサの後、長い時間練習していましたが時には榊原さんの家に行って遅くまで練習することもありました。メルシェ神父様の時代に一度御影公会堂で音楽会をし、また後に住吉の吉田会館でも一度しました。

一般信者の公共要理は和田伝道士がしていました。仙台教区長の小林司教様はその頃、大阪川口教会の助任司祭だったと思いますが毎月一回住吉に来て頂くことにしました。神父様は喜んで応じて下さり、差支えのない日曜日の午後來て、主に青年たちに聖書研究会をして下さいました。みんなで喜んで参加していました。

その頃イエズス会の神父様は芦屋に家を借りて、中学校を設立するために土地を探していましたが、六甲山の中腹に適当な土地を買って第一の校舎を建設しました。

下山手教会のペリン神父様は老齢のため一人では布教活動が難しくなったので司教様をお願いしてウンテルワルド神父様の応援を求めました。それがまた異動のもととなりました。ウンテルワルド神父様は田辺から再び下山手に来、私はまた田辺に行くことになり、今度はモラ神父様はお気の毒にも住吉に来て1か月程の後にあの大水害に会いました。

私は田辺からすこしの間玉造に行き、それから中山手に来て、3年間ファジュ神父様のところで働きました。中山手では主に乗船下船する司祭の世話をしました。

大阪教区が田口司教様の担当になり、カスタニエ司教様は教区長を辞任された後、住吉教会の主任司祭として、ここで司牧に当って居られました。ビロース神父様が助任司祭でしたが老齢で病弱のため司教様は西村神父様をお呼びになって特に子供の公教要理を頼んで居られました。昭和18年2月カスタニエ司教様は急に悪くなり、神戸市内のドイツ人医師ドクター・ジルヌの病院で3月12日に帰天されました。そのあと田口司教様の任命によって私がまた住吉の主任となりました。以前川口教会にいた時ビロース神父様と一緒にしたし、また南田辺では西村神父様と一緒にしたから三人は親しく仲良く生活しました。

大東亜戦争が日に日に激しくなって、西村神父様は終さん達と一緒に日曜日は住吉小学校に行って軍事訓練を受けて居られました。そして遂に西村神父様にも召集令状が来、出征されました。信者の数は減るばかり。防空訓練も頻繁になったので日曜日のごミサに与る人は僅かになりました。食糧事情もひど



く悪くなったので教会の空地は全部畑にして、上の段は近所の、特に信者の方のために、下の段は神父と伝道士、まかないさんの分としました。

聖堂の前には中里さんの主人（故人）が中心となって大きな防空壕を掘りました。（爆撃の事は既刊の「すみよし」に書きましたからそれを御覧下さい。）昭和20年3月から空襲の回数は頓にふえたので、日曜日の御ミサの時間を、近所の方達だけでもあずかれるように、早くしました。5月11日の青木方面の空襲で信者の方が二人亡くなりました。テレジア永瀬ちかさん（56才）は会社の食堂で、ペトロ日笠あきのりさん（14才）は学徒動員で工場で働いていた時、空襲のため家に帰る途中、国道甲南停留所近くで爆弾の破片を受けて亡くなりました。また6月10日の空襲では住吉教会区域の西半分が大方焼けました。ここでも信者の中に死者が出、高木さん(年不明)という方は隣組の組長で他の負傷者の世話をしている時直爆弾を受けて臨時怪我人収容所になった成徳小学校で二、三日後に亡くなりました。都田神父様から終油の秘跡を受けられたと思います。御影ではマリア近藤よし子さん(16才)、テレジア塩路かつ子さん(同年令位)も亡くなっています。同じ日中山手教会でファジュ神父様と古屋さん御夫妻（古屋司教様の御両親）が亡くられました。8月6日の住吉附近の爆撃では聖堂が焼かれ、近所の信者の家も大部分焼けてしまいました。

やっと戦争が終ってまた布教を積極的に始めることができるようになりました。戦災をまぬがれた伝道場を仮聖堂として使い、少しずつ聖堂らしく整え、きれいにして行きました。求道者の数がふえ、信者の家庭に公教要理に出かけるために多忙になりました。

西村神父様は復員されましたが大阪の教会の主任司祭となって行かれました。

昭和25年、パリのミッシン会総会へ日本宣教区の代表として神戸にいる司祭の中から誰か一人出席することになりました。私が選ばれ、日本管区長のエルベ神父様と共に6月5日マルセイユ号で出帆しました。私の後にはジュセン神父様が留守番として来られることになりました。私が乗船した日、フランスの私の家では母が亡くなりました。そのことをサイゴンに着いて初めて知りましたが、それは日本を離れる犠牲と共にもう一つの大きな犠牲でした。

- ビロース神父様の帰天。
- デュセン神父様、休暇でフランスへ。
- ベロー神父様の住吉教会付任命。

— 昭和29年7月から31年10月まで —

パリミッション会の総会に出席した後、一年間の休暇の許しを受けたので順調なら休みが終る昭和26年7月頃に日本に帰る筈でした。所が御存じのように25年のクリスマス頃に病気になって26年正月サンテ・エイチェンの病院に入院しなければなりませんでした。入院中病気が悪化して三度危険な状態になりましたが、皆様のお祈りのお蔭で少しずつ快くなり、ほぼ快復しました。

昭和28年9月に帰れるようになって、その手筈をしていた所、また再発して今度はパリのパストゥール病院に入院し、治療を受けました。そしてそこでは医者と相談して、ある特別の薬を服用して見て、それが効いたら、その薬をもって29年には日本に帰ってもよいということになりました。

昭和29年4月やっとマルセイユ号に乗って日本に帰ることが出来ました。6月17日神戸港に着き、皆様の温かい歓迎を受けました。帰ると田口司教様からもう一度住吉教会の主任神父になるように言われました。3回目の住吉主任神父でした。29年以来住吉で聖務に励んで居られたベロー神父様はその

間に台風で壊れた聖堂の移転と改善をし、幼稚園を造るなど随分働いて、疲れていました。私が住吉に戻った時、大きな溜息をついて、「これからは少しゆっくりできると思った」そうです。

その頃睦度恰度本聖堂建築の計画中でしたし、幼稚園の遊戯室も造ったので資金が要り、それを集める仕事を早速二人で分担することにしました。昭和31年8月に愈々聖堂の建築にかかり、喜んでこの仕事に励んでいる時東京のミッション会本部から手紙が来て、東京にいる日本語を勉強中の若いミッション会司祭の世話をしてほしいと言われました。初めは断りましたが結局承諾して2年間だけ行くことにし、住吉を離れなければならなりませんでした。その時から主任神父の務めは終わりました。

やがて東京の務めから住吉に帰り、また38年には、もう一度フランスに帰国しましたが、再び日本に帰ってからもまた、住吉教会に住みついて、結局は住吉から離れることの出来ぬ私のようなのです。

(元主任司祭一現助任司祭)